宗教学の方法論と課題

Methodology and Problem of the Sience of Religion

岡　邦　俊

一　方法論の問題

宗教学とは如何なる学問であろうか。この問題を決定するためには、二つのことを決定する必要がある。一つは、宗教学の方法論であり、二つは、宗教学の取扱う課題である。まず最初に宗教学の方法論について検討してみたい。

宗教の研究には古くから神学もあれば、宗教哲学もある。「神学と云う名前は主として古代欧洲に発展したキリスト教の神学を指すのであって、キリスト教の教義の研究を中心として、教団の歴史、教会の制度、伝道の方法などまで論じられている。しかしかような神学的研究は他の諸宗教にも何程かこれに似たものがあるので、今日ではそれらを一般に神学と呼ぶことになっている。[1]」仏教の宗乗とか宗学と云うものも仏教の神学である。キリスト教の母胎としてのユダヤ教やマホメット教にも、それぞれの神学があるわけである。

このような同じ宗教の研究としての神学と宗教学とでは、いささか学問の性格を異にするものである。ここに方法論の問題がある。

「神学というものは仏教なら仏教、キリスト教ならキリスト教、乃至その中の各々の宗派に別れて、夫々その宗派だけの研究としての別々の体系を成すのであって」[2]、それは謂はば「宗教の特殊的研究ともいわれて、これが神学の一つの特徴となっている」[3]。また神学は「自分の信仰を土台にしての研究であるということである。それは自分の信ずる宗派の教義が、何処まで理論的に正しいかということを研究するものであるけれども、その結果その教義や信仰が理論的に合はないものだとなり、信仰をただ研究の対象として、理論を第一義とするようでは神学にはならない。少くともその根本の信条だけは毀れないよう、むしろその信仰の立場を出発点として、これを合理的に理論的に組織立てて行くのが神学の立場なのである。それ故に神学の立場は時として護教的研究ともいわれ、外部から種々これに非難論議があるのに対して、自分の信条の正しいことを弁護する為の理論的研究であることも、またその特徴の一つとなっている。[4]」神学はある特定の宗教や特定

の信条が「正しいもの、合理的なものであるということを明かにする為めに試みる一つの研究である。」[5]神学はもともと護教学であり、弁護学であることを根本の前提とするものである。

従って、宗教現象一般を科学的に、客観的に、かつ実証的に研究する宗教学とは大いにその性格を異にするものである。神学はあくまでも特定の宗派、特定の信仰を是認し、そしてそれを弁護する立場にたつものである。宗教的事実、宗教現象一般を経験的に、科学的に研究する宗教学は、どの宗教が正しいとか、誤っているかを批判したり、是認したり、弁護したりするものではない。

ここで私は故石橋智信博士の神学と宗教学との相異点に関する論説を参照しておきたい。

氏はまず、神学と宗教学との性格なり、内容についてつぎのようにのべている。

「それらは（神学や宗学）結局、自分等の信仰というのは、つまり何を信じて居るのか、自宗の信仰内容をハッキリさせて行こうとするものに外ならぬ。なぜ信じて居るのか、何故そう信ぜねばならぬのか、それらを説き明かそうとするものではない。例へば、神がなぜ信ぜられるのか、不滅の霊魂が何故、在るにきまっているのか、悟りがなぜ悟られねばならぬのか、無明がなぜ発生したのか、さうした問題を説き明かすものではない。それらに就いては、それぞれの解答がイキナリ信ぜられ、既に、めいめいの信仰内容となってしまっている。その信仰内容をスッキリ組織立て、ハッキリ敍述して行こう、というのが神学であり、宗学である。[6]」自宗なり自分の信仰内容と云う既定のものがあって、これを修正することの出来ない前提として、その信仰内容を組織化し、体系化して行こうとするところに神学の特性があると云えよう。

次に、神学や宗学の根本的な立場について氏はつぎのように論じている。

「自分の信ずるところこそ、最も優れたもの、自分の宗教こそ天啓の宗教として、或は又、仏説の次第から云って唯一絶対なものであると信じきって居るのである。その優越性の信仰、絶対性の信仰の弁証に力を尽して居るのが、またそれら神学乃至宗学である。仏教の宗乗、神道の神学、基督教の神学等である。それらに於ては、研究以前に、既に結論が出て居るのである。即ち、自宗は最も優れたもの、唯一絶対なものであるという結論が、研究してみる前に、信仰として前提されてしまって居るのである。前提ぬきでなければならぬ純粋の学の態度と、信仰を前提として居る前提づきの神学の態度とは、まるでちがう。[7]」

神学の態度はどこまでも信仰することであり、「自ら信ずるところのみ唯一絶対なまことであるという」[8]態度である。「学の立場と信仰の立場とは全く異る」[9]ものである。従って、神学や宗学の研究は、「信仰には白紙で、自宗には無色で、凡てに通ずる普遍妥当な学的真実を求めんとはしなかったのである。信仰が学問をひきとめ、自分の信仰の枠内に研究を閉じ込めて居ったのである。信仰の神学に止まって、宗教の学に入ろうとはしなかったのである。[10]」

これに対し宗教学の立場はどうであろう。

「信仰の立場からでなく、純粋の学の立場から、自分の信ずる宗教のみでなく、あらゆる宗教を遍く研究しようという宗教学が発足したのである。(中略)各自の宗教の神学的研究から、各自の信仰が切り放たれ、純粋の学が遊離されて、ここに新たに、宗教の学、宗教学の誕生を見たわけである。[11]」

宗教学は決して特定の一宗教なり、一宗派の護教学や弁護学であってはならない。宗教学は Apolgy や Apologetics ではない。あくまで宗教一般の経験的、客観的、実証的な研究でなければならない。

宗教哲学もまた宗教一般を研究する学問であるが、その立場はあくまでも思弁的であり、批判的であり、価値論的である。すなはち、どの宗教が一番真理にかなっているか、価値ある宗教であるか、ということを「信仰よりは理性を第一として、純粋理論の立場から多くの信仰を客観的に見て批判してかかる[12]」のが宗教哲学である。宗教哲学は神学のように、特定の宗教とか信仰と云うものが研究の対象ではなくて、「すべての宗教を一つにして、その根本、その本質を明らかにしようとする一般的の研究、宗教全体の研究という方向に向って[13]」いるのが宗教哲学である。宗教学も特定の宗教ではなく宗教一般、宗教現象全体を第三者の立場から客観的に研究する点では、宗教哲学と立場を同じくする。しかし、「宗教の真理がどうであるとか、或はその宗教が立派なものであるか、或は不完全なものであるかという所謂価値批判をする前に、まづ以て宗教の歴史的事実を有りのままに確かめて行こう[14]」とする宗教学とも異るのである。宗教哲学はどこまでも宗教の哲学的研究であり、「宗教を其の哲学的研究の対象とし、その規範概念と真理内容とを明かにしようとする[15]」ものである。宗教哲学は本質的に哲学であって宗教ではない。従って宗教哲学はどこまでも宗教の価値を批判し、宗教の真偽を判断しようとする。これに対して宗教学は、「人類に於ける宗教的事実の科学的研究である。即ち、宗教学とは、古今東西に於ける精神的産物たる宗教現象を研究する学問である。その研究の範囲とするところは、あらゆる宗教の事実を蒐集し、之を分析し批判して、各種表現の根底に横わる事実を理解し、統一的な組織のある研究を行なうとする[16]」ものである。宗教現象一般の立場から、宗教が何であるかを学問的に研究しようとする点では、宗教学も宗教哲学も同じ立場にある。しかし、宗教学はある宗教が説き教えているような神や来世があるかどうかを批判するようなことはなく、どこまでも人々がそのような信仰を持っていると云う事実を認めて、「その信仰や儀式の様々の種類を分類して、そんなものがどうして人間の生活の一部として現はれて来たかを、まづ人間に関しただけの範囲で考へてみようというのであって[17]」経験的、科学的、実証的な研究態度は宗教哲学とはいささか異るものである。

宗教学は「神学のように自分の信仰を学的に基礎付けるのが目的ではないと同時に、一つ一つの宗教の価値を批判するものでもないので、何の宗教が正しいのか、何の宗教が誤っているかというようなことについては、直接には何等答えない[18]」のである。従って、宗教学は霊魂の問題についても、人類がそのような信仰をどんなに考えているのか、どうしてそのような信仰を持つようになったかを研究するだけで、死後ほんとうにそのような霊魂が残存するものかどうかは、宗

教学の関与する問題ではない。また祈禱についても、人間がどうして祈禱という特殊な生活をするのであるか、どんな心持ちでそのような祈禱が行われるかを究明しようとはするが、その祈禱によって人間が考えているような、ご利益が本当にあるのか、どうかは宗教学の知るところではない。宗教学はあくまでも、「人々の心理的、行動的現象としての宗教を確実に把握して、そこから宗教一般の構造や形態及び発達を考究するのである。」[19]宗教学は「人間文化としての宗教の真相を明かに」[20]するものであり、どうしてて「我々の生活に宗教が必然的なものである」[21]かを確定しようとするものであって、やたらに「宗教は貴いもの、有がたいものと決めてかかる」[22]ような盲目的な熱狂的なものではない。

さて、以上のような性格なり役割りを持つ宗教学には一つの避けることのできない仮説を負わされているようである。宗教学の最後の課題というか目標は、「宗教とは何ぞや」を究明することである。しかも、この宗教とは何ぞやを究明するためには、宗教学はあらゆる宗教現象を素材とし資料として取扱うのは勿論である。その際、宗教学が宗教現象として取りあげる素材なり資料がはたして宗教現象であるか、どうかを最終的に決定する任務を持つ宗教学にとっては、その資料なり材料がはたして宗教現象であるかどうかは、とりあげた時点では明かではないはずである。併しこのことを仮説として取りあげなければ宗教学は成り立たないであろう。このような事情は他の文化科学においても同様である。例えば、倫理学は「善悪とは何ぞや」を最終的に決定する課題を持つ学問でありながら、仮説的に善悪を素材とし資料として取りあげながら善悪を研究する。美学は「美とは何ぞや」を最終的に究明する学問でありながら、初めから美と醜とを仮説的に取りあげながら、次第に研究をかさねながら、美と醜との本質的規定に進んで行くのである。果して倫理学がとりあげた当初の善悪が真の善悪であるか、どうかは倫理学がその研究を進めて行く過程において、最終的に明かとなるものであろう。美学の場合の美と醜とについても同様である。併しこのようなことは避けることの出来ない仮説的前提といわねばならない。

そこで、これから宗教学が宗教現象であるとして、仮説的にとりあげているものを明かにしておかねばならない。換言すれば、宗教学はどのような人間生活の断面を宗教現象として仮説的にとりあげているのか、について若干の考察を試みておきたい。宗教学が研究の対象とした際に、「どのようなものを、宗教とみなして、研究の対象とするかを規定してかからなければならない」[23]のである。その際「研究者は、自分の手で、混沌たる文化現象の中から、宗教をえらび出して来なければならない。その選択の拠りどころになるものは、宗教の定義を措いて、ほかにないのである。」[24]ではその定義をするときの手がかりとなるものは何んであろうか。「その出発点においては、やはり、世間の伝統よりほかはない。世間で、伝統的に、特定の文化現象を宗教とよんでいるという事実がある。それを手がかりにするよりほかはないのである。宗教学は、それを一歩踏みこえなければならない。一歩踏みこえて、それを整理して、改めて、宗教学的研究の立場からの規定を与えなければならない」[25]のである。このような段階からさらに、

「それら現象の中から、重要な共通的性質と思われるものを選び出して、どのような特徴をもった文化現象を、宗教として取り扱うか」[26]という段階に進まねばならない。ここで行われる宗教の規定はあくまでも「作業仮設的性格」[27]のものでなければならない。「宗教学の与える定義は、絶対に動かすべからざるものではない。一応の約束である。研究者自身の、探求を進めてゆくために必要な、研究対象規定である。どのような特徴を備えた文化現象を宗教とよぶかということの、約束である。一つの暫定的なとりきめとしての、対象規定である」[28]といえよう。

このように、宗教学が取り扱う宗教現象とは、仮説的にとりあげられたものであるが、他の人間生活なり、文化現象には見られない独特のものがあることを仮説するのである。では、そのような独特の人間生活なり、文化現象と見らるるものとは、どのようなものであろうか。

「大体の目標として宗教意識の特徴を表明すれば、人心がその有限なる生存以上に、一切の統轄をなせる偉大の勢力あるを設定意識して、この勢力と自己との間に躬親的人格的関係を得んとするに発する心現象」[29]なりといえよう。端的にいえば、このような人格的関係を宗教意識と呼ぶことが出来るであろうが、このような宗教意識を伴う人間生活なり、文化現象を一応宗教現象と呼ぶことが出来るであろう。かかる宗教現象の予想なり、仮説設定に役立つものは、従来より行われてきた宗教の定義であろう。そこで、従来より行われてきた宗教の定義について、岸本教授の説によって、三つの類型を紹介しておこう。

第一の類型は、神の観念を中心としてなされた定義である。「宗教とは神と人間との関係なり」という、古典的な定義は古くしてしかも今なお多くの人々によって支持されている。これはオランダのライデン大学での宗教学の講座の初代担当者で、マクス・ミュラー博士[30]とともに宗教学の創設者の一人である、ティーレ教授[31](Correlius Petrus Tiele, 1830-1902)の定義である。世界の諸宗教の中には、神の観念をもった宗教は多いが、仏教のごとく自己啓培の道によって、普遍の真理を体得して、人間自らが覚者としての仏陀になろうとする、神の観念を持たないものもある。ただ仏教の中でも、浄土教系のものになると、ややその形を変えて有神論的になっているものもあるが、それとてもその本流は無神論的である。ジョン・デューウイ博士の主張するような、近代のヒューマニズム的な宗教や、原始宗教におけるプレアニミズム(Preanimism)のように、非人格的な超自然力としてのマナ(Mana)やタブー(Taboo)信仰の宗教も神以前の宗教といえよう。このように考えると、神の観念を中心として宗教を定義するだけでは充分とはいえないであろう。[32]

第二の類型は、人間の情緒的な経験を中心として、宗教の特徴を認めようとする定義である。神々は、清浄感、神聖感や畏敬の情などのように、宗教体験にともなって現われる特異の体験を中心とするものである。マールブルグ大学教授ルドルフ・オットー(Rudolf Otto, 1869-1937)[33]が、ヌミノーゼ(Numinose)として指摘している複合的情緒や、シュライエルマッヘル(Ernst Schleiermacher, 1768-1834)[34]が神に対する「絶対憑依の感情」を宗教に独特の感情としてとらえたものがそれである。これらの情緒は宗教の特徴として充分みとめるこ

とは出来ても、それのみを手がかりとして、宗教を規定づけることは必ずしも妥当とはいえまい。[35]

第三の類型は、人間の生活を中心として宗教の特徴をとらえようとするものである。人間の生活の中で、宗教はどのような役割、機能をはたすものであろうかを中心として、宗教を規定しようとするものである。心理学や社会学、文化人類学等は、この角度から人間や社会や文化をとらえようとしている。[36]岸本教授自身の立場もこれである。この立場から教授は宗教を定義して「宗教とは、人間生活の究極的な意味をあきらかにし、人間の問題の究極的な解決にかかわりをもつと、人々によって信じられているいとなみを中心とした文化現象である。」[37]そしてこの定義には、そのあとに次のような但書がつけ加えられている。「宗教には、そのいとなみとの関係において、神観念や神聖性を伴う場合が多い。」[38]ここでは一般文化現象の中から特に、「人間生活の究極的な意味」を明かにし、「人間の問題の究極的な解決」にかかわりをもつものと信じられている生活現象を、宗教と見なしていることが特徴である。[39]

私が特に注意しておきたいことは、岸本教授も主張したように、宗教の問題は「人間の問題」であり、その問題が究極的な意味を持ち、従って、それに究極的な解決をあたえてやる、というのが宗教である。

姉崎教授もこの点をつぎのようにのべている。「宗教は人の心的過程に依りて生存発達する者なるは明白の事実なり。宗教的現象の主体の担任者は人間にして、その意識に開発する宗教的意識は、吾人が宗教なる現象の源泉を求むべき最近又最明の根拠なり。宗教はとにかく心的現象なり。」[40]また教授は、「宗教的意識は人類の生存より生ずる自然の結果なり」[41]とものべている。さらに教授は、「これを要するに宗教学は人文史的科学としては、過去、現在の宗教を研究の対象とし、発達の観念に依りてその歴史を統轄し、その事実が人心宗教的意識の社会的発達として発表せる特殊理法を発見す」[42]とものべている。

かくて、宗教は「人の心的過程」より生ずるもの、「宗教現象の主体の担任者は人間である」宗教意識は「人類の生存より生ずる」との主張は、まことに注目すべきことである。宗教は人間が作り、人間が産み出すものであり、人間の存在を前提としてのみ宗教は考えられるものである。従って、人間生活なり人間活動の存在しない処には、宗教は存在し得ないことは自明である。このような性格を持つ宗教現象をとり扱う宗教学は、もともと「人間学」である。この意味で、世に「啓示宗教」と呼ばるるものがあるが、私はこれを宗教学の立場から肯定することは出来ない。神が宗教を啓示したとか、如来が宗教や信仰を与えたというがごとき考えは、宗教の本質上あり得ないことである。宗教の基本構造とか根本機能というものから考えると、宗教は常に人間から出た問題であり、人間の理想実現のための文化現象であるといわねばならない。文化が価値の創造であり、自然生活からは収穫することの出来ない、高度の欲求であることを思えば、宗教もまた特異の価値の創造を目ざすものである。この点から見て、宗教は文化的欲求の所産であるといわねばならない。ただ宗教以外の文化現象が常に「対人関係」によって実現され、人と人との交渉、関係、努力によ

って創造されるものであるのに対して、宗教は人間と人間以上のものとの交渉、関係という「対神関係」によっていとまれ、実現されるという特殊性を持つ点で、文化とその性格を異にする一面がある。この点を指摘する学者は、特に宗教を超越文化とすることもある。人間と人間との交渉、関係、努力によっては実現されない価値を、宗教は人間と超人間的なもの（Superhuman, Supernatural）との交渉、関係、努力によって実現する価値である。従って、究極的には文化をも超えた超越文化の性格を宗教は持つことになる。それは、宗教が常に究極的な人間の欲求や理想を実現せんとする性格を持っていることに由来するものである。このことは、もし人間が一定の環境の中である欲求を持ち、それを実現しながら、一定の社会関係を保持し、環境との調和の中に満足した生活をいとなむことが出来るならば、恐らく人間は超人間的なものや、超自然的なものにめざめる宗教の世界を必要としないであろう。実際には人間の欲求の実現を防害し、人間の生活に障害となるようなものに人間は直面し、その障害の打開のために、人間はいろいろな危機を感ずるものである。人間の生活のいとなみに危機を感じ、生活の運営を不可能なものにし、やがては生命の危機を感じ、不安にかられ、自己の無力をさとり、恐怖におののき、精神生活のバランスを失うような生活経験の中では、合理的な、自然的な順応では処理出来ないことに人間は気づくのである。ここに超自然的な、超合理的な順応としての宗教生活が芽えるのである。文化は常に、人間の自然的、合理的順応の領域で実現されるものである。しかし、宗教はこのような自然的、合理的順応が危機にさらされ、その限界点に達し、壁にぶち当った時の、せっぱつまった時の処理、順応として人間生活に発生するものである。文化の終着駅が宗教の始発駅であるともいえよう。あらゆる文化的努力がその限界に達し、壁に直面して、人間だけの努力では解決出来なくなった時、すなわち、自然的、合理的な順応が不可能になった時に、宗教は人間生活に発芽するものである。なお、宗教の研究には宗教心理学、宗教社会学、宗教民族学等もあるが、ここには紙数の関係ですべて割愛しなければならない。

二　宗教学の課題

宗教学の取扱う問題は種々雑多であるが、その中で最も主要な課題は「神観」と「救済観」であろう。神観は崇拝対象の問題であり、救済観はその宗教の与え恵む理想の問題である。いまこれらの問題について考察してみたい。

さきにのべた宗教意識の働きかける相手、これを一般に崇拝対象といってよかろう。この崇拝対象はもとより種々様々であって、この崇拝対象の性格によって、その宗教の特徴や性格も決定されるものである。各々の宗教には各々の崇拝対象があり、崇拝対象の相異は、そのままその宗教の相異点ともなるものである。このような崇拝対象となるものは、その性格上つねに超自然的なるもの、超人間的なものであるが、大別すれば二つの種類となるであろう。一つは、非人格的なもの、原理的なものである。例えば、超自然的な偉力としてのマナ、真理としてのダルマ（法）、理としてのロゴス、光明、第一原理というよ

うなものがそれである。二つには、人格的なものがあげられる。例えば、精霊（Spirit）のような個別性のはっきりしないもの、神（God）のような個別性の比較的はっきりしたものがそれである。

しかし、精霊と神とは本質的には全く別個なものではなく、それはただ程度の相異でしかない。また自然崇拝のように対象は自然であるが、その自然の中に精霊や神が宿っていると考えられている場合が多い。このような崇拝対象となるものを一般には「神」というのが通例である。精霊、神を一括して神霊と呼んでよいと思う。このような神霊の形態はまことに多く、人間生活なり社会生活、その他文化の実情に応じて各種の神霊は存在するものである。自然物そのもの、又は自然現象の人格化されたもの、或ばその主宰神である自然神又は自然霊がある。これには日月、星辰、風雨、山川、湖海、岩石、植物、森林、動物等の崇拝がある。もちろん自然崇拝といっても、凡ての自然が崇拝されるのではなく、自然的、合理的順応をもってしても処置し得ない自然現象が、宗教的崇拝対象となるのである。

死者や祖先を神と見ることから発展した祖先神や祖霊も重要な崇拝対象となっている。死霊の観念から生者の霊魂観念が生れるが、生者の霊魂は非人格的な生命、気息、生命の原質とも考えられている。人間が生きているのは、人間の中に霊魂が宿っているがためであると考えられており、病気は霊魂のしわざであり、死は肉体と霊魂との永久的分離であると考えられている。偉人や英雄の崇拝等も死者の霊として特にすぐれていると考えられるからである。ある特定の集団や個人の生活、福祉に関係があり、これを守護してくれると考えられている守護神もある。人間生活のある一面、例えば、生、老、病、死に特に関係ある神霊、また人間の職業に関係の多い神霊は職能神として崇拝されている。社会秩序の維持や、人開生活の規律や慣習の統制等を司る監視神もある。世界の創造者、人類の創造者としての創造神、至高の神と考えられる至高神の崇拝も普及している。

またそれらの神霊をその数の上から整理してみると、多くの霊を崇拝する多霊教、多くの神々を崇拝する多神教、至上の唯一神のみを崇拝する一神教、さらに、凡てのものに神性を認める汎神教等が考えれらるのであろう。なお一神教（Monotheism）の代表はキリスト教であり、汎神教（Pantheism）の代表は仏教であるといえよう。

宗教儀礼は、これらの神霊と人間とが具体的に交応する場合の手続きである。しかもかような宗教儀礼は、本来超自然的なる世界との交渉に用いられるものであるから、人間的手続きや行動を象徴化したものが多い。このような宗教儀礼の内容はまことに複雑多岐にわたっているが、これを大別すると二つに整理することが出来よう。一つは、身体的行動によるものであり、二つは、口頭によるものである。前者は「行儀」と呼ばれ、後者は「口儀」と呼ばれている。行儀に属する儀礼も実際には種々雑多である。呪術や巫術にみられるような諸種の行動、卜占、払浄、祈禱にともなう行為、礼拝の場合を初めとして、行列輪行、巡礼、舞踏、供物、犠牲、修練、苦行、参籠等がある。また口儀には呪文、祈禱、勧請、讃歌、読経、各種の発音、説教等がある。[43]

人間は宗教儀礼を媒介として神霊と交渉関係するのであるが、これ

によって人間は何を求め、何を欲求しようとするのであろうか。私はこれを宗教の理想として取扱ってみたい。

どのような宗教にも、その宗教の恵み与える理想というものがある。何らかの理想を恵み与えないような宗教には、人間は魅力を持たないのであろう。このような理想を一般には救済と呼んでいるが、事実多くの宗教の理想は救済とかお救い、お助けとなっている。併し、仏教のように救済を本来の理想とせず、身心の苦悩からの完全なる解放とか自由としての解脱、涅槃の「さとり」を理想とするものもある。救済は、救済者の偉力によって実現されるものであるから、救済を説く宗教は概ね「他力教」的な性格を持つものである。これに対して、解脱や涅槃の悟りを理想とする宗教にあっては、人間自身、自己自身の心身の工夫、訓練による自己啓培によって理想は実現するものである。従って、その性格は概ね「自力教」的である。

いまここでは、救済教の典型としてのキリスト教と、解脱教の典型である仏教の場合について概観しておきたい。

キリスト教の救済の基本的仕組には、神の側のものと人間の側のものとの二つが考えられる。神の側の仕組としては受肉論（Incarnation）原罪論（Original-sin）と贖罪論(Redemption）が考えられる。受肉論はキリストの本質論にかかわる問題であり、もともと神の子であったキリストが人間の肉体をもって、この世に出たという事実をさすのである。[44]「創造者みずからが被造物となったという驚くべき事柄を意味する」[45]のである。「ロゴスは肉体となりて我らの中に宿りたまへり」[46]といわれている。

また「イエス・キリストは、父なる神、聖霊なる神とともに三位一体なる神における子」[47]であると考えられている。では何故このような神の子であるキリストは受肉してこの世に出たのであろう。それは、人間の祖であるアダムとイヴとが神命に反逆したとの原罪によって、人類が罪の子となり、すべての人間が原罪をせ負うて生れ出る、[48][49]とされているその罪を贖うためであり、[50]神との和解と天国への復帰のためであるといわれている。罪の贖いは、具体的にはキリストの十字架上での受難と、彼の死という犠牲によるものとされている。十字架は贖罪のためである。

それは「神が罪人たる人間との交わりを回復し給わんとする」[51]ものである。内面的にみれば「十字架は、一面神の義の自己主張であり、他面神の栄光の自己否定である。ここに神の痛みが現われる。そは赦すべからざるものを赦すこと、すなわち包むべからざるものを包む痛みである」[52]と解釈されておる。かくて十字架にいる贖罪によって、キリスト教の救済は実現する。つぎに、救済の成立する仕組として人間の側で用意されるものは何であろう。それは一言にしていえば「神への信仰」である。これを今少し分析すれば、洗礼（Baptism）[53]祈禱（Prayer）[54]そして隣人愛（Universal brotherhood）[55]であろう。洗礼はキリスト教の信条を確認するための告白の儀式である。祈禱は神への信頼、感謝、讃美、請願等の表現である。隣人愛は神が人類を愛するごとく、人間はすべての人を隣人として愛する、とのキリスト者の生活実践である。このようにして、神の側の仕組と人間の側の仕組との結合によって、キリスト教の救済は実現されるのである。なおかかる

救済の実現によって人間は何を恵まれるであろうか。それは心の安らぎと平和、終末の希望である。「我らの霊の上に新生を与える処の恩恵である、すなわち、神自身の生を分有することであり」[56]また、「神の超自然的援助であり、それによって我らの心の迷いを解き、善をなし悪を避けんとする我らの意思を力づけるものである」[57]とされている。

恩恵の項目として十二種あげられているものもある。「慈愛、喜悦、平和、忍耐、柔和、善性、忍苦、温和、信仰、謙譲、自制、貞節」[58]がそれである。かくして、神はキリストを媒介とし仲保者として、罪と悪から人類を解放し、「義とせられる」人間となし、罪によりて閉ざされた天国への門を再び開き、神の恩寵を受くるに値いする人間としたのである。ここに人間の新生があり、肉の生活より霊の生活へ[59]、神えの反逆者としての生活より神の悦ぶ生活へ[60]、やがて神の国に入ることの許される平安と福祉との新しい人生が展開するとされている。終局的には、「信仰によりて義とせられる」[61]生活となり、「義人なし、ひとりだになし」[62]の人間がみな救われてゆく、感謝と喜びの生活となると味われている。

では、仏教の恵み与える理想は何であろう。それは仏教の言葉でいえば「解脱」「涅槃」「成仏」であり「さとり」ともいわれている。

仏教の原初型態は、歴史的人格としてのシャカ族（Sakya）の一王子ゴータマ・シッダールタ（Gautama Siddharta）が、心身の工夫と自己啓培の道によって、真理をさとれる覚者としてのブッダ＝仏陀（Buddha）となったという、すなわち、人間シャカが仏シャカとなったという根本事実に起源するものである。これが仏教の原点である。従って、仏教にとって最も重量な問題は、神でもなく祈りでもない。人間たりしシャカ族の一王子をして覚者たるブッダとならしめたもの、そのものが重要な問題なのである。すなわち「法」「ダルマ＝Dharma」こそ、仏教の中心課題となるであろう。キリスト教では神の存在が出発点であり、神の存在を否定すればキリスト教は成立し得ないであろう。併し、仏教の出発点は神ではなく人間であり[63]、現実の人生における人間の苦悩である。この現実の苦悩をいかにして解決し、この苦悩からいかにして自由になり、解放されるか、ということが仏教の中心課題である。

ブッダとは正しくこのような現実の苦悩から完全に解放され、自由になる道と法、すなはちダルマを体得した人間である。この解放されて自由となった状態を解脱といい、涅槃といい、この状態に到達し得た人間をブッダと呼ぶのである。かくして仏教の出発点となったものは、人間の実存にまつわる現実の苦悩である。また、仏教の理想は、この苦悩の根源をつきとめることにより、この苦悩から完全に解放され自由になり、最高の平和と福祉とを体得したブッダとなることである。しかも、万人はブッダ自身と同じ道を歩み、同じ方法で修道工夫するならば、ブッダと等しき覚者となり得ることを仏教は説くのである。仏教には神もなく祈りも必要とはされていない。「自帰依、法帰依、自灯明、法灯明」[64]こそ、ブッダが死の直前において弟子達に残した最後の説法でもあった。また日頃の説法の中にも、法句経の一句が教えるように、「おのれこそおのれの主（あるじ）である、他にいかなる主があろうか、自己のよく調御せられたるとき、人はまことにえがたい主を

得るのである[65]」と、のべられている。ただひたすらに自己の身心の工夫と、自己啓培の道こそ仏教のすべてであるといえよう。

では、具体的にはいかにしてブッダとなるのであろう。それはブッダ自身が歩み説かれた道を自ら歩み、その教えに自ら従う外にはない。ブッダの残された教えは、「四諦、八正道」「十二因縁」「三法所」等といわれるものを初めとして、「縁起」「空」「無我」等の思想にも示されているが、ここでは紙数の関係でこれ以上ふれないことにする。

ただ一言しておきたいことは、自力教、解脱教としての仏教の中に、他力教、救済教としてのキリスト教に極わめて類似した浄土教系の仏教のあることである。浄土教の代表ともいうべき浄土真宗の教義、信条等は一見してキリスト教と同じであるように思えるものもある。すべての人間を罪悪生死の凡夫と見る真宗、ただ信仰によりて義とせられる、とするキリスト教と、唯信独達を説く真宗、罪人を招くためにキリストはこの世に来たとするキリスト教と、悪人正機を説く真宗、等々を考えるとき、その類似性に驚くことである。しかし、このような両者の類似は形式的、表面的のものでしかなく、本質的には全く異る背景思想から表われたものであることを忘れてはならない。詳細は[66]拙著「浄土真宗とキリスト教」を参照していただきたい。

なお、宗教学の取扱う課題の中には、神観や救済観の外にも教会、教団の問題、伝道の問題等多くのものを残しておるが、これも紙数の関係ですべて割愛しなければならない。

（大学・短大教授）

〔注〕

① 宇野円空、宗教学通論、一九頁
②③ 同上、二〇頁
④ 同上、二〇—二一頁
⑤ 同上、二一頁
⑥ 宗教学概論、四頁
⑦⑧⑨ 同上、五頁
⑩⑪ 同上、六頁
⑫ 宗教学通論、二一頁
⑬ 同上、二二頁
⑭ 同上、二二—二三頁
⑮ 加藤玄智、岸本芳雄、宗教学稿本、七—八頁
⑯ 同上、九頁
⑰ 宗教学通論 二四頁
⑱ 同上、二四—二五頁
⑲ 同上、二五—二六頁
⑳㉑㉒ 同上、二八頁
㉓ 岸本英夫、宗教学、一一頁
㉔㉕㉖ 同上、一二頁
㉗㉘ 同上、一三頁
㉙ 姉崎正治、宗教学概論、一〇頁
㉚ Introduction to the Science of Religion.
㉛ Elements of Science of Religion. 2 vols.
㉜ 宗教学一四頁
㉝ Das Heilige. 1917. travs. by J. W. Haruey. P. 5-11.
㉞ Discourseson Roligion. chap. 2.
㉟㊱ 宗教学、一五—一六頁
㊲㊳㊴ 同上 一七頁
㊵ 宗教学概論、一〇頁

㊶ 同上、一一頁
㊷ 同上、二八頁
㊸ 「神霊」と「儀礼」に関しては龍谷大学編、宗教要論、第三章、一節、二節参照
㊹ マタイ伝、一―二三、ヨハネ伝、一―一四
㊺ 溝口靖夫、キリスト教の主要思想六五頁
㊻ ヨハネ伝、一―一四
㊼ キリスト教の主要思想、五四頁、ヨハネ伝、一〇―三〇
㊽ 創世記、三
㊾ キリスト教の主要思想、三五頁
㊿ ルカ伝、一―六八、使徒行伝、四―一二
(51) キリスト教の主要思想、八五―六頁
(52) 同上、八七頁
(53) ロマ書、五―二
(54) マルコ伝、一一―二四、ヤコブ、五―一六、テサロニケ前、五―一六―一八、コロサイ、四―一三
(55) マタイ伝、一二―四八―五〇
(56)(57) Father Connell's: The New Baltimore Catechism No. 3. P. 65–66.
(58) Ibid. P. 75.
(59) ヨハネ伝、三―五六
(60) ロマ書、八―七―八
(61) ガラテヤ書、二―一六、五―五、ロマ書、五―一―五
(62) ロマ書、三―一〇―一二
(63) Huston Smith: The Religion of Man. P. 90.
(64) 中阿含 二―四
(65) 法句経、一六〇偈
(66) 岡邦俊、浄土真宗とキリスト教、八―九頁

(以上)